

Title	書評：鈴木智之著 『村上春樹と物語の条件： 『ノルウェイの森』から『ねじまき鳥クロニクル』へ』 青弓社、2009年
Sub Title	
Author	塚田, 修一(Tsukada, Shuichi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2010
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.15 (2010. 7) ,p.122- 126
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20100700-0122

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：鈴木 智之著

『村上春樹と物語の条件——『ノルウェイの森』から『ねじまき鳥クロニクル』へ』青弓社、2009 年

塚田 修一

評者は個人的に、文学研究者と仕事をする機会（一柳廣孝・久米依子編『ライトノベル研究序説』）があったのだが、そこで彼らから社会学（者）に対して向けられる二つの眼差しの存在に気がついた。一つは、「期待（あるいは羨望）の眼差し」であり、もう一つは、「失望（あるいは落胆）の眼差し」である。彼らにはどうやら自分たちの仕事（文学研究）は何かと内閉的であるとの自覚があるらしく、あらゆる事象を縦横無尽に論じる（ように見える）社会学に、いささか過剰な「期待」を寄せる。ところが、いざ社会学による分析を見てみると、碌に内容分析もせず、すぐにマクロな説明変数に還元してしまう——それはしばしば「社会学的還元主義」と揶揄される——、そのいい加減さ、野蛮さ（!）に驚きあきれ、「失望」する、というわけだ。

この二つの眼差しを向けられて居心地の悪さを感じていた折に、上梓された本書を手にした。

本書の筋立てを簡潔にまとめておこう。本書は村上春樹の『ノルウェイの森』（1987 年）と『ねじまき鳥クロニクル』（1994 - 95 年）の二つのテキストを対象とし、「記憶」・「他者」・「身体」という三つの要素——これらは「物語」の駆動を阻害するものであり、またそれゆえに更なる「物語」を起動させる、「物語の条件」である——を相互に交錯させあるいは解きほぐしながら、テキストに刻まれた「^{リアリティ}現実の感覚」に迫っていく。そうして抽出された「恐怖」・「偶発性」・「他者性」という現実の様相を示すキーワードのもと、「^{サブバイヴアル・ストーリー}生存の物語」という、私たちが生きる世界の「現実的な手触り」を炙り出していく、という仕掛けとなっている。

この、興味深く刺激的な本書の各章の具体的な内容に関しては、紙幅の制約もあり立ち入ることは出来ないが、章立てを以下に記しておく。

第一部 記憶・他者・身体 ——『ノルウェイの森』と自己物語の困難

序章 自己物語の氾濫／困難

第 1 章 想起（の物語）の失敗

- 第2章 身体／他者——自己物語とそのさまざまな困難
- 第3章 「直子」——沈黙する身体
- 第4章 「緑」——語り続ける身体
- 終章 忘却の忘却としての物語

第二部 災厄の痕跡——日常性をめぐる問いとしての『ねじまき鳥クロニクル』

- 序章 日常性への問い
- 第1章 他者の同一性＝正体をめぐる物語
- 第2章 偶発的身体
- 第3章 飽和する記憶
- 終章 恐怖の持続

さて、本書において筆者が設定する方法論は、テキストに刻まれた「物語」の企ての破綻・困難、そしてそれゆえに紡ぎ出される更なる「物語」と困難、という試行の過程を再構成する、という至ってシンプルでゆるやかなものである（pp.15 - 18）。これは少々ナイーブにすら感じられるものであるが、このシンプルさ、ゆるやかさゆえに、本書は、文学テキストを社会学的に分析する際に呼寄せてしまう様々なしがらみ——例えば「テキストの魅力を台無しにしている」といった批判や、テキストの読みの精緻さ（の競い合い）に関する議論など——をすり抜け、「文学社会学」としてのパフォーマンスを成功させている。

こと、日本において文学テキストと社会学との関係は、決して幸福なものではなく、実際、「文学からの社会学」あるいは「文学をダシにした社会学」と呼ぶべき性格のものがちらほらと存在してきた程度である——このような状況を、井上俊は「社会学による、文学の密輸入」と表現している（井上俊「社会学と文学」『社会学評論』Vol.59, No.1）——ことを鑑みるならば、本書は何よりもまず、「文学社会学」の最良の成果として評価されなければならない。

さらに本書は社会学的な自己物語論の系譜に位置付けられる。

ここで、便宜的に自己物語論の展開を、それと親和性の高い構築主義の展開と重ねて考えてみるとすれば、それは「構築主義」的な自己物語論と、「構築主義批判」的な自己物語論にざっくりと整理することができる。すなわち——思い切り単純化してしまえば——、「物語によって自己は構築される」というのが「構築主義」的な自己物語論の骨子であり、「物語によって自己は構築されるが、それ故に、語りえないもの、あるいは物語の困難を抱え込んでしまう」というのが「構築主義批判」的な自己物語論の骨子である。

「物語」であるがゆえの困難——「物語」の駆動の阻害——に照準し、その困難ゆえに紡ぎ出される「物語」を描き出そうとする本書が立脚しているのは「構築主義批判」的な自己物語論であると言えるだろう。——もっとも、筆者自身はこの「構築主義批判」的な自己物語論か

らも、やや距離を置こうとしているようではあるが（鈴木智之「他者の語り—構築と応答のあいだで—」『三田社会学』第 13 号）。そしてそこに（冗長さを避けて適度に注釈に落としこみながら）重ね描きされる、著者の豊堯な思考^{アイディア}の断片を見落とすべきではない。アーサー・フランクの『傷ついた物語の語り手』をベースとしつつも、ブルデュー、バウマン、アガンベン、ベンヤミン等の思想を自在に猟歩し、独創的な自己物語論として読者を魅了している。

常々、著者の仕事には二つの系が存在しているように評者には見えていた。一方は村上春樹や目取真俊といった作家たちの文学テキスト、すなわち広い意味での文化表象に照準するような系の仕事であり、他方は著者が編者を務める『ケアとサポートの社会学』に代表される、人々の具体的な<生>に寄り添うような系の仕事である。一見したところ、何の繋がりもない、というか対極的ですからあるように思われるこの二つの系であるが、本書を通して明らかになるのは——そして評者が個人的に腑に落ちたのは——、この二つの系が、筆者の“物語の困難への、繊細なまなざし”によってしっかりと貫かれている、ということである。そしてその“まなざし”の温かさは、終章の最後に書き込まれた——恐らく筆者は書かずにはいられなかったのであろう——以下のような“希望”に何よりも顕れているような気がする。

（中略）一つのストーリーが語り出され、ある形をとって終わり、それが閉ざされたことによって何かはその世界の外部に排除される。しかし、次の機会には、その「他なるもの」を内部に組み入れて、また新しいストーリーが始まる。その暫定的な語りの反復そのものが、私たちの生存の技法となるのではないだろうか。私たちは、物語り続けることができるならば、生き延びることができるのである（pp.340 - 341）

以上のおおまかな学術的位置付けおよび評価に、評者の個人的な感想を付け加えておこう。

評者にとって何よりも収穫であったのは、村上春樹のテキストが「^くず^くず^くず^くって^くる社会学的な批評欲——例えば、最新作『1 Q 8 4』における「僕らの記憶は、個人的な記憶と、集合的な記憶を合わせて作り上げられている」という記述などは、そのまま記憶の社会学ではないか！——とでも言うべきものを、見事に満足させてくれたことである。

また、嫌な読後感——往往にして、自分の好きな作家のテキストを冷徹に分析されてしまうと、特に評者のような天邪鬼な性格の者は、不愉快さを感じてしまうものだ——を全く抱かなかった。それは、筆者自身の内で「テキストを（内在的に）楽しむこと」と「分析対象として読むこと」とが矛盾することなく、またどちらかが捨象されるということなく共存しているからであろう。筆者が「テキストを楽しんでいる」様子は、青弓社ホームページに寄せた「突撃隊の消息について」という短い文章から特に伝わってくる。

(<http://www.seikyusha.co.jp/genkou/blank87.html>)

かくして本書は、冒頭で述べた文学研究者からの「期待の眼差し」を十二分に満足させ得るものであるし、さらには「失望の眼差し」を跳ね返すものであるだろう。

しかしながらそこには一抹の心もとなさが残ることを告白しておかねばならない。それは特に本書における「現実」の位相に由来している——つまり「現実」という用語の指示内容が、（文学研究者を含む）多くの読者にとって、いまいちピンとこないのではないかということである。

先述したように、本書において析出される「現実（の様相）」を形容するキーワードは、「恐怖」や「偶発性」、「他者性」という、やや漠として抽象的なものであり、そこでいう「現実」とは、社会学の専門用語に引き付けて言えば「社会的現実」に近いもの、あるいは著者が依拠するジャック・デュボアの表現を借りると「現実感覚」ということになるだろうか。しかしながら、多くの読者は、テキストの同時代（八〇年代から九〇年代）の具体的な文化状況や社会意識、言説といった、もう少し別の位相の「現実」を想定してしまうのではないか。批評理論に心得のある文学研究者であれば、^{テクニカルゲーム}新歴史主義的な分析を期待するかもしれない。

もちろんこれは読者の“身勝手な期待”、あるいは研究分野の違いによる“齟齬”として一蹴することができるだろう。だが、村上春樹のテキストから「現実の感触」を明らかにしようとする本書にとって、こうした位相の「現実」への目配りは、実は必要かつ重要な作業であったように思われる。

というのも、周知の通り、村上春樹のテキストにはあちらこちらにさも意味ありげに同時代の具体的な文化状況が描き込まれており、それが“ハルキ・ワールド”を彩る魅力となっているからである。また「社会的現実」や「現実感覚」という概念には、同時代の具体的な文化・社会状況、あるいは言説（のネットワーク）が重要な要素として包含されている筈である。「釈迦に説法」を承知でデュボアの『現実を語る小説家』から引用すれば、「現実感覚という考え方は、（中略）人間存在をとりまきこれを規定している一切の物質的・文化的な文脈への関心を示すものでもある。そこに含意されるのは、世界のより具体的で実質的な姿に対する感受性であり」(p.27)、また「社会的現実の中には、特定の読者がテキストの言表を理解するために必要となる実在 (realia) の他に、その価値や制度などについてその時代が保持し、小説言説の前提条件をなしている膨大な周辺的な言説が含まれる」(p.47) のである。

——ただし、本書には既にこう予告が用意されている、と読むこともできるだろうか。

僕が（村上春樹も読まず）マイケル・ジャクソンや松田聖子を聞きながら浮かれ騒いでいた八〇年代にこそ、いまになって色濃く浮かび上がってくる「恐怖」の根がある。あるいは、その「恐怖」を回収しきれないものとして宿してしまった決定的な分岐点がある。テキストはそう語っているように見える。そこから新しい「生存のための闘いが始まるのだ

と、村上春樹の一連の作品は告げている。テキストに埋め込まれたその思考の軌跡をたどる作業は、これからも僕の仕事になるだろう。(pp.347 - 348)

ここで筆者へのリクエストが許されるとすれば、もう少し長めの「予告篇」をどこかでお聞きしたいと思う。

さて、評者の若手としての特権を悪用 (!) する形で文字通り奔放に書き進められ、「物語」としては殆ど破綻した恰好で本評の紙幅は尽きようとしている。だがこれは、その破綻ゆえに紡ぎ出される新たな「物語」である、著者リプライへの楽しみを準備したことにはなっているだろう。

[本体価格 3,000 円]

(つかだ しゅういち 慶應義塾大学大学院社会学研究科)